

播磨の伝統的な祭りに関する考察

一加東市佐保神社の秋祭りと朝光寺の鬼追踊を例として一

姚 少華

キーワード：祭り，伝統的，播磨，秋祭り，鬼追踊，機能

1. はじめに

日本で「祭り」という行事は民俗文化の中でもっとも特徴を示すものである。毎年全国各地で色々な祭りが行われている。日本で行われている「祭り」の分布の広さ、数の多さ、規模の大きさは他の国の人にとって驚くべきことである。地勢や気候風土と歴史の違いは、日本のそれぞれの地域に、多様な民俗行事を育むこととなった。

兵庫県は摂津、播磨、丹波、但馬、淡路の旧五国からなる広い県である。長い歴史の中で、気候風土のちがいは、独特の民俗行事を育んだ。本研究の対象地域である「播磨地域」は、かつての「播磨国」である。

本研究は「播磨の祭り」に焦点をあて、事例として採用した。加東市の佐保神社の秋祭りと朝光寺の鬼踊りについて主催する方に聞き取り調査を行い、播磨地域の伝統的な祭りの起源、季節の特徴、祭りの現状、運営と機能等を明らかにすることを目的とする。

2. 播磨の伝統的な祭りの考察

(1) 地域的分布

「播磨」という名前は、かつて日本の地方行政区分だった令制国の一つ「播磨国」からなった。全域は兵庫県神戸市垂水区・西区・姫路市・明石市・相生市・加古川市・三木市・高砂市・小野市・加西市・宍粟市・たつの（龍野）市・西脇市・加東市・多可郡・加古郡・神崎郡・揖保郡・赤穂郡である。神戸市の垂水区、西区、北区淡河町、須磨区の一部は、昭和16年と22に神戸市に編入されるまで、播磨の明石郡に属していた。

『播磨の祭り』（藤木、北村、1999）巻末の「播磨の祭り歳時記」には354件の祭りが示されている。市町村単位で、播磨各地域の祭りの数量分布をみると、偏りがある（図1）。特に姫路市は祭りが多く分布している、年に59回あり圧倒的に多い。第2位の明石市は37回、次は宍粟市の31回である。姫路市と明石市は、戦国時代には播磨国の主城だったの地である。また、姫路市は県内第二位（神戸市に次ぎ）の商工業と人口を擁する都市であり、播磨地方の中心都市である。第三位の宍粟市の場合は、その面積（東西約32km、南北約42km、県内第2位）が要因であると考えられる。要するに、祭り地域の偏りや分布の偏りは古代稲作の先進さ、地域の経済、面積、人口などが大きく関係している。

(2) 季節による分布

図2は播磨地域で各月に行われている祭りの件数を示している。この図を見ると、播

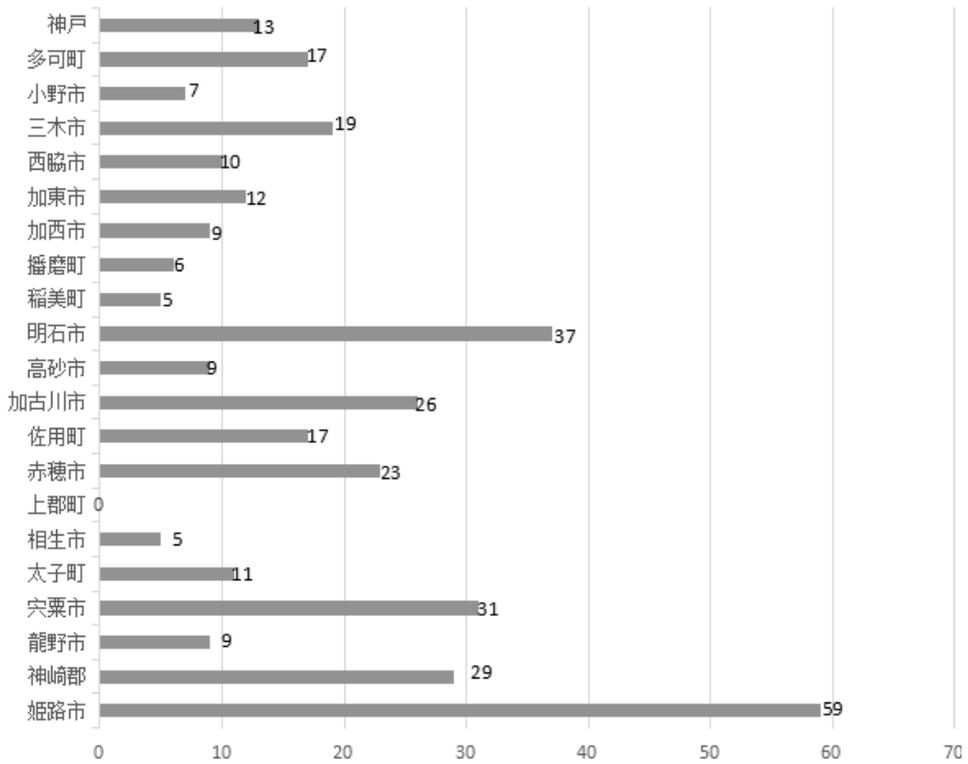


図1 一年間の播磨各地域開催の祭り
出所：藤木，北村（1999）より作成

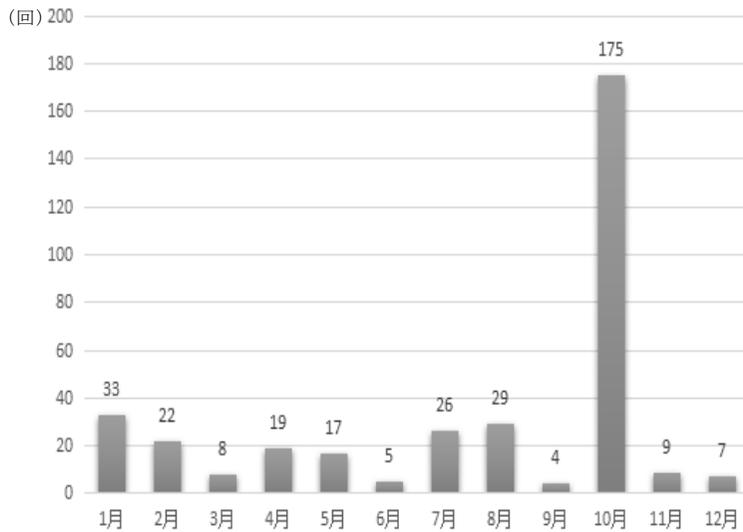


図2 播磨の祭りの月別件数
出所：藤木，北村（1999）より作成

磨地域一年間、月別の祭りの件数は曲線の形の分布を示している。では、播磨地域の祭りの季節ごとの特徴を詳しく検討する。

i 春祭り

春と秋は農作の重要な時期である、一年間一番注目されている秋祭りより、播磨地域の春祭りは「田遊び」が著しい。

茂木（2003）は田遊びの実際と意味について、以下2点を指摘している。①田もしくは田にみたてた祭場を設定し、そこに神を招き稲作過程を演じる儀礼、②一年の稲作過程と田の出来ばえを演じて見せることによって、その年の豊作を神に約束させる予祝の意味をもっている。その一つが姫路広峯神社御田植祭である。その年の実際の稲作に先んじて、擬似的に田植えから稲刈りまでを行い、その年の稲作の豊作を祈願する神事である。

春祭りは豊年、五穀豊穰を祈るということが多い。「つまり稲を中心に穀物の優作をひたすら祈願する、その真剣な気持ちが多様な形をもって表現されたのが、春祭りの内容として形作られているのである」（倉林、2004）。

ii 夏祭り

播磨の夏祭りは3つの種類に分類できる。

1つ目は疫病や飢饉の災いを祓って、死者を弔う鎮魂儀礼に関する祭りである。例えば、明石の祇園祭、観音さん、大念仏会、姫路の火祭り精霊送りなどである。祇園祭は踊りや山車など盛大に行われる。もともとこの山車に精霊をおびき寄せて、そのまま送り出すためのものであった（倉林、2004）。

2つ目は、農作業による労働の疲れがしばらく終わる夏に、休憩をする意味と芸能などの要素が含まれている祭りである。例えば、姫路長壁神社の「姫路ゆかたまつり」があげられる。「姫路ゆかたまつり」の起源は、江戸時代の姫路城主榊原政岑が発案し今も続けられている伝統の祭りである。しかし、その他の市町の夏祭りは江戸時代以前には起源がなく、専ら近現代的な行事として始まったものや他地域の伝統的な夏祭りを模倣したものも多い。例えば、小野市の「小野祭り」は北播磨最大級のまつりとして注目されている。今年（平成28年）は第39回を数える。

3つ目は農村社会の夏季の農事に関わる行事である。例えば、姫路の「虫送り」、明石の「おくわはん、虫送りの愛宕講」などである。「虫送り」とは農作物の害虫を駆逐し、その年の豊作を祈願する目的で行われる祭りである。おもに初夏に行われる。「おくわはん」とは明石市の無形文化財に指定されている農耕神事である。毎年、田植えが終わった6月に、農家の代表者や講親らが羽織袴姿で、桑の木製の小さな鍬「おくわはん」と金色の御幣を持って神社に集まり、水の取り口から水田地帯をまわり、豊作を祈る。

iii 秋祭り

秋祭りは、一般的には収穫祭と考えられている。収穫祭であるから、秋祭りは他の季節の祭りより盛大に行われる。播磨の秋祭りは豪華絢爛な大屋台と北部山間地域の中世的な芸能と宮座という地域的特色がある。

播磨地域の秋祭りに登場する屋台は、太鼓の音に合わせて男衆が高々と担いで勇壮に舞い、乗り子が拍子に合わせて太鼓を叩く。しかし、最近では少子化が進み、祭りの担い手不足が深刻化している。

現代に伝承されている播磨地域の祭りにあてはめると、2つの系統を見出すことができる。1つ目は上鴨川住吉神社の田楽を中心とした神事舞（田楽、リョンスン〈王の舞〉・獅子・翁舞）、2つ目は播磨国総社の一ツ山大祭・三ツ山大祭に登場する五種の神事〈弓鉾

指・神子渡り・一つ物・競馬・流鏝馬)である。これらの芸能や神事は播磨地域において最も中世の面影を色濃く伝えている祭りである。

iv 冬祭り

冬祭りは、他の季節の祭りに比べて数が少ない。播磨地域の冬には、赤穂市の「赤穂義士祭」が有名である。「赤穂義士祭」は、史上有名な江戸時代の「赤穂四十七義士」(深夜に旧主浅野長矩(播磨赤穂藩の第3代藩主)の仇である高家吉良義央の屋敷に討ち入り、吉良義央および家人を殺害した(赤穂事件)元赤穂藩士大石良雄以下47人の武士である)にちなんで行われる祭りである。明治36年(1903年)から行われており、現在は赤穂市最大の祭りとして毎年12月14日に盛大に行われる。

なお、冬の時、お正月の鬼追い、追儺、弓を射る行事は、播磨地域だけではなく、全国的に広く行われている。

3. 加東市の伝統的な祭りの考察

(1) 加東市の概要

加東市は兵庫県の中央部、播磨地域の東側に位置する内陸の都市である。平成18年(2006年)に社町、滝野町、東条町が合併して、加東市となった。平成27年(2015年)国勢調査によると加東市の人々は40,332人であり、平成22年の前回調査に比べて、151人増となった。また、世帯数は15,104世帯で、平成22年に比べて、971世帯増となった。このように平成27年に加東市全体では人口が増加している。しかし市内の状況は地区によってバラツキがみられる。本研究でとりあげる佐保神社は社地区、朝光寺は畑地区にある。両地区の平成18年以降の人口の変化を示したのが図3である。

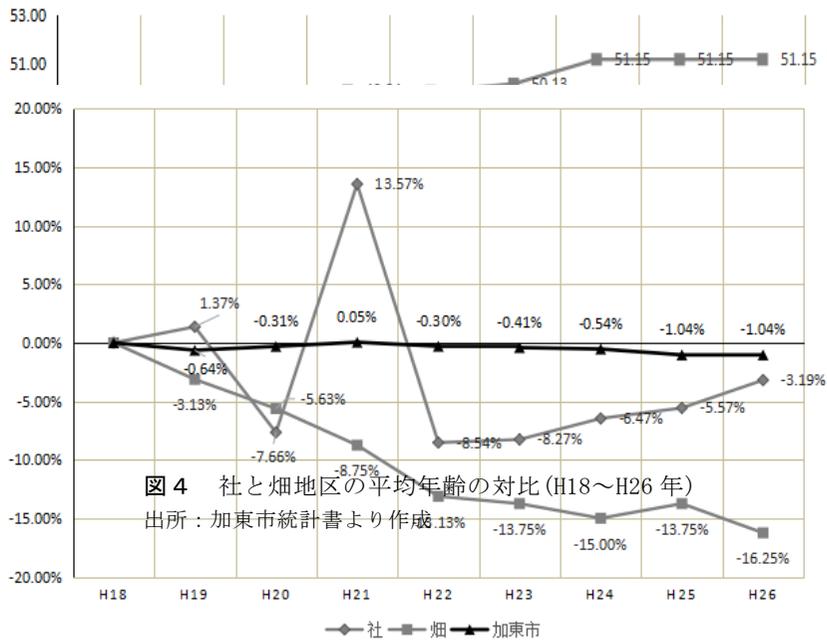


図4 社と畑地区の平均年齢の対比 (H18～H26年)
出所：加東市統計書より作成

図3 社と畑地区人口の対比 (H18～H26年)
出所：加東市統計書より作成

図3は平成18年(2006年)を基準にして、平成26年(2014年)までの各年の人口、全体を見ると、平成18年以降、社地区と畑地区また加東市全体としての人口は減少している。社地区は増減を繰り返して、平成21年(2009年)は人口のピーク期13.6%の増加にあった。しかし、次の平成22年(2010年)は-8.5%に減少し、その後人口は少しずつふえてきている。一方、畑地区は急激に減少している。平成26年(2014年)の人口は平成18年(2006年)より16.3%に減少した。これら社地区と畑地区の人口変化に比べて、加東市の人口はほぼ一定している。

またそれぞれの地区の平均年齢に注目してみると、社地区、畑地区と加東市の平均年齢は40歳以上である。図4をみると、畑地区の平均年齢は平成18年(2006年)の47.1歳からずっと増加していて、平成26年に51.2歳になった。このように、畑地区は少子高齢化が年々深刻している地域である。また、社地区の平均年齢は加東市に比べて若い。両方の平均年齢とも徐々に増加している。

(2) 佐保神社の秋祭り

佐保神社は加東市社地区にある。北播磨第一の大社と言われている神社である。佐保神社は垂仁天皇23年(654年)の創建と伝えている。当初は鎌倉峰(加西市)に降臨した大明神が由羅野に移り、宮が建てられたことに始まるとされる。それ以来、旧社町、旧滝野町、小野市の一部にまたがる広い範囲の氏神として人々の深い信仰を集めてきた。尼將軍として有名な北条政子が当神社を崇敬し、本殿の再建や四方に八基の鳥居を建てるなど、承元4年(1210)にはすでに播磨有数の神社として知られていた。佐保神社は当初、坂合

神社と呼ばれていた。ところがこの呼び名が時代と共に変わり、佐加穂となり、更に現在の佐保神社となった。

佐保神社の秋祭りは、北播磨有数の規模で多くの人が参詣し、にぎわいを見せる秋祭りである。祭礼の時には、2台の神輿と、上中、新町、上組、下組から4台の布団屋台が練り出される。

表1で示すように、10月10日は宵宮、11日は本宮である宵宮は夕刻頃から屋台の町内巡行が行われ、宵宮芸能大会など様々なイベントも行われる。本宮は朝から、村で屋台や神輿を練り歩く。13時から神輿、屋台の宮入りが始まり、屋台が境内に据えられる(図5)。13時30分から奉納剣道大会が始まり、13時40分から大門地区の獅子舞が奉納される。14時40分から4台屋台練り合わせを披露する。

ちなみに、かつて播州地方の秋祭りが「けんか祭り」とも呼ばれる。その理由は、屋台をぶつけ合うその迫力ある様子からきている。屋台が壊れれば壊れるほど神の意志にかなうとされている。

西岡(2005)の研究によると、『屋台の分類は4つがある。まず、その屋根の形体から大きく二つに分類することができる。華やかな布団を数枚重ねて屋根とする「布団屋根型」と、神輿と見まがうような屋根を持つ「神輿屋根型」である。さらに、「布団屋根型」は布団の屋根が平な「平屋根型」と四隅に反りがある「反り屋根型」とに分類される。一方「神輿屋根型」は、練り方に都合の特徴とこれに対応した舁き棒の形体的特徴とに注目して「練り合わせる型」と「練り型」とに分けた』。佐保神社の屋台の特徴は、屋根部分に反り返った大座布団を重ねていることで、「反り屋根型」の屋台である。

表1 佐保神社秋祭りのスケジュール表

	時間	内容	備考
10月10日 宵宮	18:30 から	宵宮芸能大会	
		バルーンショー	マトム健児
		踊りと歌	クルミ
		腹活術	福小介
		大道芸	ミス・サリバン
		大ビンゴゲーム	
10月11日 本宮	12:00	上田獅子舞奉納	
	13:00	神輿、屋台4台の宮入	
	13:30	奉納剣道大会	
	13:40	大門獅子舞奉納	
	14:40	4台屋台練り合わせ	

出所：佐保神社秋祭りポスターより、筆者作成

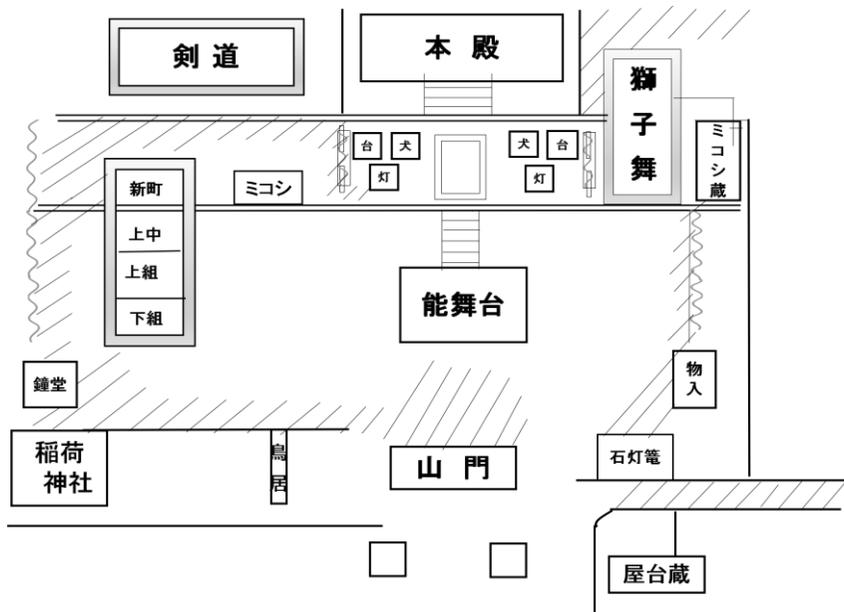


図5 佐保神社秋祭り境内配置図
出所：佐保神社所蔵資料より，筆者作成

(3) 朝光寺の鬼追踊

朝光寺は加東市畑地区にある仏教寺院である。山号を鹿野山（ろくやさん）と称する。宗派は高野山真言宗，本尊は2 軀の十一面千手千眼観世音菩薩立像である。朝光寺の創建については，孝徳天皇白雉二年（651 年）天竺（インド）から，渡来した法道仙人（住吉神明）の開基によると伝えている朝光寺の鬼追踊は，毎年5 月5 日に行われる，翁1 人と鬼方4 人で演じられ，採りもの太刀一口，斧，錫杖各一の追儺行事である。

創立当時より「般若踊」と呼ばれ，法道仙人の作と伝えられる般若の面（鬼の面ともいう）をつけて，修正会（寺院で正月より3 日間または7 日間，国が栄えることを祈る法会），結願の追儺行事（悪を払い疫病を除く儀式）として，明治の神仏分離を影響して中断までは旧暦の正月一五日に行われてきた行事であった。明治20 年（1887 年）頃から5 月の稲種まきの無事を祈願して八十八夜法要会式に移行して復活した。

本堂内陣で僧侶の大般若経読が始まると，後堂では檀家（寺院からみて，その寺に属し布施する家，あるいは信者。神社の氏子にあたる）の青年が踊りの身仕度をする。

まず松明を持った翁面をつけた住吉明神（鎮守神）が登場し，単調な半鐘の音に合わせ松明を持って「祓いの踊」から始まる。続いて松明を受けた赤面鬼が一番の踊として鎮守社・本堂・大宝塔に火を捧げる「火祀りの踊」を行う。その後，斧を持つ青面鬼，太刀を持つ黒面鬼，錫杖を持つ黄面鬼（写真1）と順に踊って，邪鬼を払う二番の踊をする。最後は鬼が一団となって三番の踊を群舞し，青鬼，赤鬼が堂の正面につるした鏡餅を斧で切って焼く「餅割の踊」を行う。

踊りは単調な鐘の拍子にのり、大きく跳躍したり、採物を振るなどの所作を繰り返し、五穀豊穰、無病息災を祈る。翁の「祓いの踊」は朝光寺の鬼追踊の特徴である。一段上位の翁の先導によって鬼追が始められることは、珍しいと言われている。踊の由来は明らかではないが、採物の太刀、錫杖の年記銘から、室町期にその期限が求められる。



松明の赤面鬼

斧の青面鬼

太刀の黒面鬼

錫杖の黄面鬼

写真1 鬼追踊に登場する鬼

出所：平成28年5月5日、筆者撮影

4. 伝統的な祭りの機能

(1) 経済的波及効果

時代が変わり、祭りの意義が変わってきた。しかし、祭りには、地域社会に対して、短い時間の中での集客効果と地域の観光や商工業の活性化など様々な形で地域振興をもたらすことは事実である。

北播磨最大の夏祭り「小野まつり」では、夏の風物詩として、毎年約5,000発の花火が打ち上げられる。今では、「おの恋おどり」に県下最多の123チーム、約2,700人が参加し、約14万人の来場者を迎える一大イベントとなっている。小野まつりには、観光客や遠方から踊りに来てくれる人が、交通費を使って、食事をして、お土産を買うなど、観光客の消費支出が見込まれる。また、観光客の消費支出以外にも、主催者経費（花火制作費や広告を宣伝や会場設営費など）がある。詳しい経済効果のデータが見つからないが、そこからも大きな経済効果が見込めるだろう。

鈴木（2014）は、行祭事やイベントに関わる経済効果の推計を検討した。その祭りの経済波及効果は図6で示す通りである。来場者の消費支出などの直接効果だけではなく、間接効果として地域内産業への経済波及も指摘されている。

つまり、伝統的な祭りの一つ機能は観光資源として観光客を誘致することとどまらず、地域経済の促進や地域活性化につながるものである。

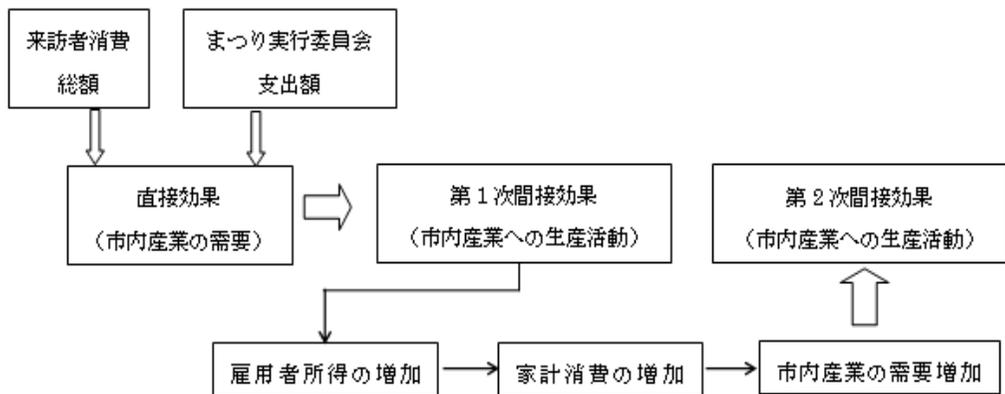


図6 経済波及の概念図
出所：鈴木（2014）より引用

（2）参加者アイデンティティの確認

祭りの機能は、金銭的な効果だけでなく、参加者に対して自己アイデンティティ確認欲求が満たされるということがあげられる。

ここではイベントと伝統的な祭りの区別が見られる。イベントは企画者の視点、商工会議所は大勢の観光客を誘致する目的から、さまざまな工夫を凝らしたイベントを企画する。企画者にとっては、何人集まったか、人々が集団として共通の意識をもってくれたか、どれくらいものが売れたかということが大切である。イベントは企画者の意図実現のための手段である。

伝統的な祭りは企画のイベントを比べて、神聖化したものである。祭りは人の気持ちを高揚させ、日常生活のなかで心のまわりに堆積した不純物をふるい落とす。そしてまた新たな気持ちで人生と対峙するための力を与えてくれることができる。経済的報酬より、伝統的な祭りは精神的報酬の獲得の機能がある。精神的報酬とは、参加者にとって、自己アイデンティティの確認である。

たとえば、祭りの時、大人のみならず、子供までも神輿や屋台を練り歩いたり、踊りを踊ったりと、参加者は自分の居場所を見つけ、充実の時間を過ごすことができる。言い換えると、現在の人間関係のネットワークのなかに意味のある存在として自分を再発見がなされる。

（3）地域の繋がりともちづくり

日本の祭りには、民衆の関与度が高い。その重要な原因は住民たちの郷土愛にある。地元の人にとって、年に一回行われる祭りは、自分の故郷を宣伝や展示する機会である。地元で行われる祭りを全国から評判と声望をもらうことは、彼らにとって大切な事である。そのために、個人も積極的に参加して、自分の力に貢献する。祭りを全部自分たちで作っていくには、地域のことをよく知らないといけなく、それを知ることで、自分たちで地域を支えていかなければいけないという、意識が生まれる。その結果、祭りの中で地域の人との繋がりが深まり、地域で助け合って暮らしていけるような、地域をより良くすることに繋がる。

決して祭りの間だけが重要なものではなく、祭りによって祭りが終わったあとも人が繋がっている。祭りの場だけでなく、準備や片付けのときにも、新しい情報環境やコミュニ

ケーションの場を作ることが地域の活性化に繋がっている（粉川，1988）。つまり，準備や片付けといった，人々が協力し合うようなきっかけを作ることが必要で，そのあともその仲が続くということに意味があり，その中で，地域に目を向ける者も増え，地域全体の自治意識の向上につながることも考えられる。人と人が繋がり地域を活性化させ，地域社会のまちづくりの役目もある。

5. おわりに

本稿は，播磨地域の伝統的な祭りを注目して，参加観察や聞き取り調査などから祭りの実態を考察して，播磨地域の伝統的な祭りの特徴，運営と機能を検討した。

祭り地域の偏りや分布の偏りは古代稲作の繁栄，地域の経済，面積，人口などが大きく関係している。そのため，播磨地域で行われている祭りの件数をみると，姫路市，明石市の祭りは圧倒的な多い。

日本は四季が明瞭で，農耕は天候の影響が大きい。その結果，農耕の時期の違いで祭りの件数と形もそれぞれ違う。収穫祭であるから，秋祭りは他の季節の祭りより盛大に行われる。10月に行う祭りも多い。佐保神社の秋祭りは，2台の神輿と4台の布団屋台が練り出されて，奉納剣道大会と獅子舞も奉納される。播磨の秋祭りは豪華絢爛な大屋台と北部山間地域の中世的な芸能と宮座という地域的特色がある。

伝統的な祭りは観光資源として来場者の消費支出などの直接効果だけではなく，間接効果として地域内産業への経済波及も指摘された。参加者に対しても自分の居場所を見つけて，精神的報酬の獲得と自己アイデンティティ確認という機能があげられた。祭りの時だけではなく，祭りの準備と後でも地域の人との繋がりが深まり，地域で助け合って暮らしていけるような，地域の活性化に繋がっているという結論ができた。

最後に，本研究を行うにあたり，聞き取り調査にご協力頂いた安達さん，佐保神社の宮司神崎さん，朝光寺の住職丹生さん，そして兵庫教育大学の南塾先生に感謝をしたいと思います。

引用文献

- 藤木，北村（1999）：『播磨の祭り』，神戸新聞総合出版社，pp.167-174.
森田 三郎（1990）：『祭りの文化人類学』，世界思想社，pp.119-121p.
倉林 正次（2002）：『祭りのこころ』，おうふう，pp.121-139p.
社町中央公民館（1992）：『鹿野山朝光寺』，兵庫県社町所編
西岡 陽子（2005）：風流祭礼の中の屋台．兵庫県教育委員会編，『播磨の祭礼』，pp.28-29.
鈴木 健司（2014）：地域イベントの経済効果の推計－愛知県半田市の「第7回はんだ山車まつり」の調査を例として．知多半島の歴史と現在 18，pp.65-75.
茂木 栄（2003）：祭りと芸能－稲作を中心に．神道国際学会編，『神道の祭り』，pp.69-75.

引用 URL

- 兵庫県ホームページ：観光客動態調査
https://web.pref.hyogo.lg.jp/ie15/ie15_000000005.html，2016年6月10日閲覧。
加東市ホームページ：加東市統計書
<http://www.city.kato.lg.jp/shiseijoho/tokeijoho/1457747660827.html>，2016年6月18日閲覧。
日本の祭り・花火大会：日本の祭りの歴史と変遷
http://www.homemate-research-festival.com/useful/12704_tour_007/，2016年6月20日閲覧。

A Study on Traditional Festivals in Harima Region
-With Autumn Festival of Saho Shrine and Ghost Festival of Chokoji
Temple in Kato City for Example-

YAO Shaohua

Key Words: festival, traditional, Harima, Autumn Festival, Ghost Festival, function